脳と才能

連載第7回
酒井 邦嘉
東京大学教授・言語脳科学者

「音楽は万国共通の言葉である」

『鈴木鎮一のことば集ー心を育てる』 p.60
（公益社団法人才能教育研究会、2018年）より

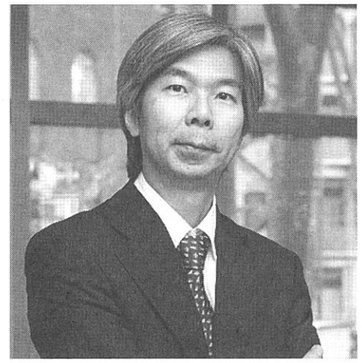
鈴木鎮一先生のお言葉を紹介しながら、その奥義(おうぎ)を科学で考えるという連載です。才能教育研究会がめざす「才能」には、どのような意味が込められているのでしょうか。そしてその才能は、脳のどんな働きに支えられているのでしょう。

音楽が言語と共通のものならば、音楽にも言葉のような「意味」があるのでしょうか。たとえばベートーヴェンの交響曲第5番は、「ダダダ・ダーン」という印象的なフレーズから始まります。この動機（モチーフ）は、「このように運命が扉をたたくのだ」というベートーヴェンの言葉とともに有名になりましたが、残念ながらそれは弟子のシンドラーによる作り話だったようです。一方、ピアノ練習曲集などで有名な弟子のツェルニーは、「小鳥の鳴き声を利用したもの」と伝えています（ツェルニー著、バドゥラ＝スコダ編・注釈、古荘隆保訳『ベートーヴェン全ピアノ作品の正しい奏法』全音楽譜出版社, 1971, p.26）。はたしてその小鳥は「チチチピー」とでも鳴いたのでしょうか。ちなみにツェルニーは、10歳のときからベートーヴェンのレッスンを受けていて、「練習に際してベートーヴェンがうるさく注意したのはレガートです」と書き残しています（同 p.10）。

同じ時期にベートーヴェンが作曲したピアノ・ソナタ「熱情」では、冒頭と終わりの低音域に、これとよく似た動機「(ン) タタタ・ターン」（「ン」は休符で、2番目の「タ」にアクセント）が繰り返し使われていて、緊張感が漂う独特の表現となっています。交響曲第5番の第3楽章では、3拍子のリズムに合わせて「ン」を省いた「タタタ・ターン」（最初の「タ」にアクセント）に変わり、終楽章では「タタタ」が三連符となった音型も加わって、いずれもホルンが力強く先導する形で推進力を増していきます。このように、たとえ最初の思いつきが小鳥のさえずりだったとしても、パターンや意味を変えながら、豊かな感情の力に変えていくところに、ベートーヴェンの真骨頂があります。鈴木先生は、「ベートーベンの月光の曲を聞いて、月夜の景色を思い浮かべて、それでこの曲はよく解った、と思う人々は一番わからぬ人々であろう」（前掲 p.60）と述べていました。

◇

ベートーヴェンの気持ちを想像しながら弾いています



酒井邦嘉（さかいくによし）
1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。専門は言語脳科学で、人間に固有の脳機能をイメージング法などで研究している。主著に『言語の脳科学』『科学者という仕事』『科学という考え方』（中公新書）、『脳の言語地図』『ことばの冒険』『脳の冒険』（明治書院）、『脳を創る読書』『考える教室』（実業之日本社）、『芸術を創る脳』（東京大学出版会）、『チョムスキーと言語脳科学』（インターナショナル新書）。

音楽の表現に、具体的な意味があるとは限らないかもしれません。しかし、そこに何かを表現したいという「意図」は必ずあるのではないでしょうか。それならば、音楽も言葉と変わらないことになります。実は言葉でも、「ぜんぜん、やばいおいしいよ」のように、時とともに意味が逆転してしまうことがあるくらいです。そこに話し手の意図を想像しようとする脳の働きがあるからこそ、会話が成り立つわけです〔「意味」と「意図」の違いについて、川添愛さんの名作『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット』（朝日出版社, 2017）をお読みください〕。作曲家が楽譜に書き残せることには、おのずから限界がありますが、演奏者が作品の意図（つまり「作意」）をくみ取って再現できたとき、聴き手に本当の創意が届くのでしょう。鈴木先生は次のように述べています。

「自分で演奏しているときには、バッハなりベートーベンなりが自分の中に生きて、その全人格をもって私に話しかけて来る。こんなにまざまざとした人間の感覚の世界は、あるいは外にないかも知れない。〔中略〕バッハに感動出来る能力に自分が高められたとき、ベートーベンにも感動が出来る自分になっていることにきがつくだろう」（同 p.59-60）。作曲家の話したかった言葉に思いをめぐらせ、自分の感覚を通して意図を解釈すること。そこに音楽が万国共通の言葉だという秘密があります。

◇

今年はベートーヴェンの生誕250年という節目にあたるので、世界中でベートーヴェンの曲がたくさん演奏されることでしょう。昨年は、ピアノ・ソナタ全曲の「ベーレンライター原典版」が新たに出版されました。校訂者のデル・マーは、「私の目指すところは作曲者の意図に限りなく近い楽譜を提示することです」と述べています。音楽を普遍的な言葉だと思い、その意味よりも意図をわかろうとすることが大切なのですね。そうした新たな気持ちで、交響曲第5番を聴き直してみたいものです。